

特別記事

『東京帝国大学五十年史』の編纂について

大久保 利 謙

序 言

このたび『東京大学史紀要』がでるについで、『百年史』の前身である『東京帝国大学五十年史』の編纂の由来について何か書けという編輯当局からの依頼をうけた。考えてみると、半世紀以前の『五十年史』の編纂に直接関与した者は、服部宇之吉主任をはじめほとんど亡くなられて、わずかに平泉澄博士と私とが生きているぐらいである。

私はそういう故老の一人として今回の百年史の編集委員にくわえられた。そういうところからまた、先般『五十年史』に関する思い出を書けという注文を広報委員会からうけて、『学内広報』三〇〇号に「東京帝国大学五十年史の編纂に関する思い出」を寄稿した。

そのときも述べたように、あの『五十年史』が、どのようにして、またどのような編纂計画、予算で開始されたかというようなことは、卒業したての末輩の私などは、知らされてもいなかったし、また知るよしもなかった。服部先生の高名は知っていたが、在学中はすでに定

年後で、『五十年史』の編纂がはじまってからはじめてお目にかかった。どういふわけで主任となられたのかは、これも知らなかった。そういうわけで、『五十年史』の思い出としては、『学内広報』に書いた程度のことしかないのである。

そこで、また『五十年史』編纂事情のことを書けといわれても、前文を繰りかえずにすぎないと一応返事をした。『五十年史』の編纂開始当時の書記官は江口重国氏であった。この江口氏がもし御元氣だったら詳しい事情もわかるうと思っただのであるが、どうやらすでに亡くなられたということである。そこで編纂開始に至る頃の事情を調べるには、どうしても当時の記録にたよるほかにないことになる。記録によるにしても、半世紀前の本学史編纂開始の経緯を調べておくことは必要なことであろう。これは、私にも興味あることであるので、百年史編集室のほうに、まず当時の評議会の記録を調べてもらうことをお願いした。その結果、「本学五十年史関係」という薄いファイル一冊がとどけられた。内容は大正十一年十月以降の評議会議事録、学部長会

議の議事録からの五十年記念式典挙行関係と五十年史編纂関係の協議事項の抜粋と五十年史編纂関係の人事、予算関係の書類等であつて、今日では五十年史編纂関係の唯一の原史料である。終りのほうには私の名前もでているので一閲してまことに感慨にたえなかつた。そこでこのファイルを種として編纂の由来をたどつてみることにする。

大正十一年十一月の評議会の決議

この「本学五十年史関係」のはじめの部分は、評議会と学部長会議議事録の關係記事の抜粋である。その冒頭は大正十一年十月三日の評議会で、この日は「本学創立記念式並ニ起源ヲ何年トスルヤノ件」が議題となつて、協議の結果は、熟考の上次会決定となつた。この創立記念式とは五十年式典のことで、このときはじめてこれが正式に採りあげられたのである。

翌十一月十四日の評議会では、「明治十年ハ綜合大學ノ始メナルヲ以テ此年ヲ起源トスルコトニ評議会ニ於テ決議」とあり、ついで「創立五十年式ヲ挙行スルヤ否ノ件、協議ノ末相当ノ儀式ヲ実施スルコトトシ各学部長ニ原案調査ヲ委嘱スルコトニ決ス」とある。これによつて前会の「創立記念式」が創立五十年式典のことであることが明らかとなり、同時に、明治十九年の帝国大学設立からさらに十年を遡つて「帝国大学令」以前の東京大学を含め、その創立の明治十年を以て本学の起原とすることがこのとき正式に決つたのである。東京大学の十年を含めたのは、これが「綜合大学」の始めであるという理由によるのであつた。この考え方から、東京大学と帝国大学とが連続性におい

てとらえられ、両者が前後一体となつて、本学のいわば本体像ともいふべきものが一応きまつたのである。これは極めて重要な決議といわなければならない。この十一月十四日の決議は、その後修正、変更もされないまま、今回の百年史にそのまま引継がれている。

評議会は右の決議を以て一応、本学創立五十年式典関係の議事を終つて、その具体案については、学部長会議に委嘱することとした。よつて問題は、これからは学部長会議に移されたのである。

翌大正十二年二月十三日開催の部長会議で、第一高等学校（現教養学部、当時本郷）と農学部（駒場）との敷地建物交換を促進する件とともに、五十万円寄附金を募集して約三百人収容可能な記念寄宿舎の建設の話し合いが行われた。これは、創立五十周年を機会に本郷キャンパス整備完了の必須要件としたためで、それがこのとき議題となつたのである。ついで同年五月八日の部長会議においてつぎのような決定をみた。列挙すると

(一) 創立五十年式ニハ欧米、東洋ノ著明ナル大學ノ代表者ヲ招待スルコト、内外ノ重ナル學會並ニ本學ニ關係アル外國人、元教師、例ヘハ「モールス」(元東京大學教師、動物學 Edward Sylvester Morse)ノ類ヘ案内スルコト

(二) 期日ハ四月トスルコト(綜合大學トナリタル月)(原註)

(三) 各種ノ學會ヲ開催ノ希望

(四) 本學ノ歴史ヲ編纂スルコト詳細分ト二種
要略分ト二種

(五) 写真帳編製ノコト

(六) 歴史材料ハ各学部ヨリ提出ノコト、日本ノ文化ヲ外國ニ知ラシ

ムルノ必要

(七) 編輯委員ノ選定ハ三上(参次) 文学部長ニ一任ノコト

三上部長ノ談ニ、日本固有学問ニ関スル分ハ既ニ編纂出来、和蘭学等ニ係ル件ハ浜尾(新) 前総長カ大概如電ニ話サレタルコトアリ、高見氏(筆者曰、鷹見泉石家ノ誤リカ) 所藏品ヲ貰ヒ受クルコトモ出来セン、且、展覽会ヲ開キ種々ノ現品ヲ陳列スルモ可ナラン云々

右の三上文学部長の談話は、文学部史料編纂掛(現史料編纂所の前身)における蘭学史料調査のことである。また本学の歴史編纂の件がこのときはじめて議題にのぼった。これが『五十年史』の編纂が議題にのぼった発端である。本史と略史の二種とし、またその構成はたんに制度史のみでなく、各学部の研究業績などの内容、実体をも書いたものとするものであったようである。つまり『五十年史』と『東京帝国大学学術大観』とを併せたようなものを編纂する意図であったようである。なお、創立五十年式典は「四月トスルコト」とあって日は未決定である。これが後に評議会の議題になっている。

つぎの同月二十二日の部長会議には、とくに文部省から次官赤司鷹一郎と、専門学務局長松浦鎮次郎が出席し、古在由直総長から、来る大正十六年四月、本学五十年式典挙行の希望と、第一高等学校と農学部との敷地建物交換、記念寄宿舎建設の三件が陳述された。このうち記念式典に要する費用は来る十四年度ぐらいから請求をする必要があるという談合が行われた。

右の部長会議は、とくに文部次官、専門学務局長の臨席を求めて、

『東京帝国大学五十年史』の編纂についで

総長から陳述を行ったのであったから、これは本学として、正式に五十年式典挙行の希望を、文部省当局に表明したことであった。つまり、これがこの問題に関する最初の外部への正式発表である。ところでこの表明陳述は右の三件が一括してなされている。これは農字部の本郷移転によって本郷キャンパスの完成を成就したうえで五十年式典を挙行したいという要望があったからである。

『五十年史』の編纂開始の経緯

右のように、一旦、来る大正十六年四月を以て五十年式典挙行を決して文部省方面にも総長陳述で表明したが、全く思いもかけぬ大地震が、右の表明から四ヵ月後の九月一日正午、東京地方を急襲して、本学の本郷キャンパスは全地域にわたって大被害を被り、附属図書館の全壊というような文化的大不幸に逢った。ついで大正十五年十二月二十五日、大正天皇ご死去、昭和改元となった。この改元の翌昭和二年は大正の十六年にあたり、大正十二年五月の表明では四月に創立五十年式典を挙行する筈であった。しかし、学内外の大震災被害によってこの案件は自然流案の形で見送られざるをえないこととなった。

しかし、本学としては、このまま見送るべきことではなかった。そこで、この昭和二年がおしつまつた十二月十三日の学部長会議において、古在総長から左の発言があった。

五十年式ハ何時ノ時期ヲ最モ可トスルヤ。

復興中ノ建物全部カ完成セサレハ不可ナランカト思ハル、多分昭和四年以後ナラン、農学部カ移転シ来ラハ可ナリト思惟ス、之ニ

ツキ五十年史ヲ編纂スルコトニ決シ居レリ、而シテ右資料ハ各部局ヨリ提出ヲ願フ予定ナリ。

右の総長の諮問に答えてどういふ論議があつたか、議事録には記載がないからその結果はよく分らない。ただこの会議には、後に五十年史編纂主任となつた服部元文学部長がとくに出席している。これは、総長の発言中に「五十年史ヲ編纂スルコトニ決シ居レリ」といふ言葉があるのと照合するものと解されるので、これによると、この部長会議において近く五十年史編纂着手となることが正式に内定したものである。

翌昭和三年の新学期開始早々の四月二十四日の評議会において「本学五十年式ニ関スル件」が上程され、「本件ハ予テ内諾ヲ得タル服部氏ニ本学五十年史編纂ヲ囑託シ、之ニ助手一名位ヲ付スルコトトシ、尚細部ニ就テハ服部氏ト協議ノ上着手取計フコトニ決定」ということになった。議題は五十年式に関する件とあるが、この際は五十年史編纂の着手の件のみが決議された。

このときは、古在由直総長は前学年末に病氣のため退陣して法学部の小野塚喜平次教授が総長事務代理となつていた。評議員は斯波忠三郎(工)、塚本靖(工)、俄国一(工)、柴田桂太(理)、山崎覚次郎(経)、右田半四郎(農)、松原行一(理)、鈴木梅太郎(農)、立作太郎(法)、姉崎正治(文)、中村清一(理)、藤岡勝二(文)、林春雄(医)、河津暹(経)、中田薫(法)、麻生慶次郎(農)、穂積重遠(法)、瀧精一(文)、塩田広重(医)、長與又郎(医、欠席)らであつた。小野塚総長事務代理から

本学五十年史ノ編纂ハ必要ナルヲ以テ曩ニ服部氏ニ非公式ニ依頼シ承諾ヲ得タル事カ古在総長ノ時ニアリシ事ヲ安藤(円秀)学生監ヨリ小野塚ニ話カアツタカラ其後服部氏ニ面会ノ節其話ヲ致セシ引受テモ良イト言ヘリ。

という発言があつた。五十年史の編纂は必要のことなので、さきに非公式に承諾をえてある服部元文学部長に編纂を正式に依頼すると、「引受けても良い」といふ正式の承諾をえた、という報告である。この小野塚総長事務代理の発言によると、昭和三年度から服部宇之吉名誉教授に対して正式に編纂を依頼し、服部名誉教授が引受けたので、これが評議会の議題に上程されたのである。この総長事務代理の発言に対してつぎのような質疑応答があつた。

姉崎 本学創立記念日ヲ明治十年トセシ起原如何

菊沢書記官 右ハ学部長会議ノ際決議サレシモノナリ

菊沢書記官の答弁は去る大正十一年十一月十四日の学部長会議の決議をさしているのである。すると姉崎評議員は重ねて

明治十年ニハ南校ト称シ、経、理ナク、医学ハ別個ノモノニシテ其後明治十六年ニ合併セシモノト史料ス

これももちろん姉崎評議員の思い違いであつたが、明治初年の大学関係のことがすでに大方忘れられてしまつていたことを物語るものである。

総長事務代理から重ねて、木村甲一会計課長に対して服部名誉教授に対する謝金と、助手一人位の手当の支出についてただと、「支出シテモ差支ナシ」といふ答があつたので、総長事務代理は

其レデハ服部氏ニ五十年史編纂ヲ囑託シ、助手ハ一人位トシテ着手シテハ如何、皆様ノ希望モアラバ直接服部氏カ僕ニ述ベラレ度シ

と述べる。「異議ナシ」ということで、五十年史編纂を服部名譽教授に囑託することが決定した。これが五十年史編纂の発足決定の評議会議決である。

右の評議会決議について左の覚書が作成された。

東京帝国大学五十年史編纂ニ関スル覚書

- 一、編纂主任ヲ服部博士ニ囑託ス。
- 二、編纂期間ヲ約参ヶ年トス（出版時迄ヲ含ム）。
- 三、編纂主任手当ハ各年度末ニ於テ総長ノ意見ニ依リ適宜之ヲ支給ス（昭和参年度ハ約金壹千円ノ見込ナリ）。
- 四、編纂費ハ編纂主任手当ヲ除キテ其他総計（出版費ヲモ含ム）約五六千円トス。

五、五十年史編纂及服部博士囑託ノ件ハ昭和三年四月二十四日、評議会ノ決議ヲ経、右経費ニ関スル件ハ木村会計課長ノ承諾ヲ得タルモノナリ。

昭和三年五月十六日

（本件ハ昭和三年六月十一日ノ評議会ニ於テ報告ス）

以上が五十年史編纂開始に至るまでの経緯の荒筋であつて、これは前述したようにもっぱら評議会、学部長会議議事録の抄録によつたものである。

編纂委員の選定は、さきの部長会議議事録によると、歴史関係の三

上文学部長に一任されている。当時三上部長は宮内省の明治天皇御紀編輯を引受けていたので自ら當るわけにゆかず、まず文句のない学内長老として支那哲学の服部名譽教授に御鉢がまわつたのであろう。その内情はすでに当事者がみな物故した今日は知るよしもないのである。現役教授をさしおいて長老の名譽教授を選んだのが注目されるが、これは、本学の「正史」を書くという事大意識からであらう。

服部主任が決るとつぎは助手の選考となるが、その結果は、文学部の国史の平泉澄助教授が編纂囑託となり、同じく文学部の副手として国史研究室にいた私が編纂補助囑託となった。これは恐らく、日本の歴史関係の編纂だから国史研究室の者に、ということからの人事であつたらうと思われる。それ以外の特別な事情はなかつたらう。編纂期間に印刷期間を含めて約三年、予算は編纂主任謝金を除いて約五、六千円であつた。巻数、内容構成等は白紙で、それらは執筆に當つてからすべて決定した。

『五十年史』の前史の問題

『五十年史』を執筆するに當つて、時期区分をきめることがまず先決問題となる。明治十年の四月の東京大学の発足から本史を書き起すことはすでに決定済みであつたから改めて問題とならなかつたが、この明治十年の東京大学発足には当然前史を設ける必要があるもので、それをどう設定するかが、本史の「五十年史」の位置づけの前提ともなるべき重要問題であつた。今回の百年史は、寛政年間の昌平坂学問所（昌平齋）から前史を書く予定案となつている。これは妥当な案で私

も賛意を表するところである。近代日本の官学の起原は、まずその辺にあったといつていいのであるから。

ところで、『五十年史』の場合はどうであつたのか、という問がでてくるであらう。それには、一応、これまで本学の源流についてどういふふうにかえられていたかということを見ておく必要があるが、これは、古く『一覽』の巻頭にある「沿革略」をみればだいたいの見当がつく。そこで以下この「沿革略」を材料として本学の歴史像の推移というようなことを少しく検討してみることとする。

東京開成学校の『一覽』は明治八年二月はじめて刊行した。(明治十二・十三年『三学部一覽』の「沿革略史」明治八年の条に「是年始メテ東京開成学校一覽ヲ英和両文ヲ以テ編撰印行ス」とある)。この八年『一覽』のはじめに「東京開成学校沿革略誌」五ページが載っている。東京医学校の『一覽』も刊行されているそうであるが未見。よつて管見においては右の八年『一覽』の「沿革略誌」が最も早いものである。

この「沿革略誌」は

東京開成学校、原ト洋学所ト名ヅク、飯田町九段坂ニ在リ、幕府徳川氏ノ時、筒井肥前守、川路左衛門尉、大久保右近将監等ニ命シ協議創建セシムル所ナリ、紀元二千五百十五年^{安政二年}古賀謹一郎ヲ以テ洋学所頭取トス、二千五百十六年^{安政三年}二月、蕃書調所ト改称ス

といふ書きだして、幕府の洋学系官学の蕃書調所を東京開成学校の起原として、幕末から、明治七年十月、浜尾新が学校長心得となるまでの、校名の変遷その他、学制、教職員等の変遷を略記している。

叙述は蕃書調所以降を一系の学校として連続的に書いているのが特

長で、その間の幕政から朝廷への政権交替は「二千五百二十八年^{明治元年}、王師東征ニ際シ暫ク校ヲ閉ヅ、是年九月、朝廷之ヲ再興シ……」とあるだけである。さらに是年「十二月、校名ヲ改メテ大学南校トス」とあるが、この改名の原因となつた大学本校については全く書いてない。以下、大学の廃止(設立を書かず廃止だけ書く)から文部省の新設を書き、明治六年四月、「遂ニ今ノ校名ニ定メ、之ヲ専門大学トシ」と専門大学昇格に及んでいる。

つぎに翌明治九年刊の『一覽』にも「沿革略誌」があるが、これだいたい八年『一覽』の「沿革略誌」の踏襲である。ただ幕末の部分が半分ぐらいに簡略化してある。大学校のことは八年『一覽』同様記載がない。このような校歴が、当時の東京開成学校当局の沿革認識であつたとみてよからう。なお紀年には、日本紀元を表出しているが、これは西洋の紀年方式に準拠したものと考えられてはなはだ面白い。

ついで東京大学となる。東京大学設立当初は四学部構成であるが、法理文三学部と医学部とは総理、教職、場所、その他すべて別々であつた。したがつて『一覽』も別々に刊行している。まず三学部であるが、明治十二・十三年の『一覽』巻首の「沿革略史」は前記(前史)と正記(本史)との前後二期を設けているのでこの時期区分を設けたことが著しい特長である。前記の冒頭は

我国西洋学ノ濫觴ハ宝永年間、徳川七代将軍家宣、始メテ其臣新井君美(筑後守白石ト号ス)ニ命シ、羅馬和蘭人ニ親接シテ其本土ノ事情ヲ探問セシメシニ原キ……、

と江戸中期の洋学の起原からはじめて幕末の蕃書調所・開成所の沿革

を書いて大政奉還による一旦廃止までを書いている。つまり幕末までが前史である。本史の正記は、明治元年九月の開成所の復興からはじめ、大学南校改称以降、編年的に制度の変遷を述べ、「明治十年四月、文部省令シテ本校ト東京医学校ヲ合併シテ東京大学ト為シ……」というふうに東京大学の創設を記している。次年の十三・十四年の『一覽』はこれと変らない。

明治十年には『東京大学医学部一覽』がでてゐる。第三章「沿革略誌」は、

安政五戊午（紀元二千五百十八年）、伊東玄朴主トナリ、戸塚静海等ニ謀テ徳川政府ニ請ヒ新タニ一舎ヲ神田於玉ヶ池ニ設立シ種痘館ト名ク……

と、種痘館の設立から書きだして、これを医学部の起原としている。年代記略風に書いて明治以降も同じ調子で、「明治十年四月、文部省ニ於テ本校及東京開成学校ヲ合セテ東京大学ト改称シ、本校ヲ東京大学医学部ト為シ校長ヲ綜理ト改メラル……」と、東京大学医学部となるまでを掲げてある。東京大学はたんに改称で、本質的にはもとの医学校と何等変らないという書きぶりである。

明治十四年の機構改革で四学部が一体化されても一覽はまだ別々であった。翌十五・十六年の『三学部一覽』の「法理文学部紀事略」は十年四月の東京大学改称からはじめてゐる。これは『五十年史』と同じである。しかし、前史の部分はない。これはこれまでの『一覽』と変つてゐる。ところがつぎの十六・十七年の『三学部一覽』となると大改訂を行つて新しい型を打ちだしてゐる。「東京大学記事略」とい

う四学部総合体的な表題とし、内容も開成・医学両系統を併記してゐる。「東京大学ハ法理医文ノ四学部ヲ併合シテ成ル、今其起原ヲ叙スレハ……」と書きだし、まず「法理文ノ三学部ハ徳川幕府ノ洋学所ニ濫觴シ……」とし、明治元年の開成所の接収、大学南校と改称から明治十四年の機構改革までの三学部系の沿革を書き、ついで医学部に移つて、「医学部ハ徳川幕府ノ医学所ニ淵源セリ」からはじめて、三学部系と平行的に明治十四年まで書き、それから行を改めて明治十四年六月の職制改正以降に及んでゐる。これは十四年の機構改革を重要視する時期区分である。したがつて、この改革以前は明治十年四月の東京大学設立を含めては前史的の扱いである。これは、この十四年の改革によつてはじめて実質的な総合大学になつたとする見解である。これは、この頃から三学部の本郷移転がはじまつて、両学部当局、学生らにもようやく総合的な東京大学という実感がでてきたであろうという当時の大学の意識とも無縁ではなからう。しかし、『五十年史』編纂開始当初の、「明治十年ハ綜合大学ノ始メナルヲ以テ」という時期区分観とは若干ズレることになる。創設当時の実情からすれば、十四年の改革のほうがより画期的であつたろうと思われる。

右の明治十六・十七年『三学部一覽』は、その後の『一覽』沿革略の原型となつてようやく型がきまつたようである。『東京開成学校一覽』以降、その「沿革略」をみると、たびたび時期区分の基準が變つてゐる。しかもかなり基本的に変貌しているが、これはどういふ理由、根拠からであつたらうか。これは要するに、まだ明確な歴史像が固定しておらず、その都度改めたためのものであらう。幕末以来の名称、

機構の変遷がかなり複雑であったこともその理由となつたろう。

明治十九年、帝国大学となつて以降は先の十六・十七年型の踏襲で「帝国大学ハ東京大学及工部大学校ヲ合併シテ成ル」と書きだし（『明治二十三・二十五年一覽』）、つぎに「今其起原ヲ叙スレハ……」として、ほぼ前掲『一覽』どおりである。これがその後の『一覽』の「沿革略」に定着して、『五十年史』の編纂当初の昭和初期に及んでいる。

文章も同じであるから、機械的につぎつぎと踏襲されたのである。

そこで本題の『五十年史』に移ることにしよう。本史は明治十年四月からとし、前史は明治元年、新政府の成立に伴つて旧幕府の昌平費、開成所、医学所の三官字の接収と復興からはじめて、この復興以前幕末期のことは序説にきわめて簡略に記するに止めている。つまり前史のさらに前史という軽い扱いである。このような本史、前史の扱い方は、前述したような五十年史編纂当初の「明治十年ハ綜合大学ノ始メナルヲ以テ」という評議会の決議によるものであるが、これは、先きに検討した初期以来の『一覽』の「沿革略」にみえる時期区分観とはかなりのズレが見出される。その理由をここで十分説明しないが、これは要するに時代の推移によるので、たとえば創立当時は明治十四年の改革が画期的であったが、五十年後になってから顧みるにやはり、「明治十年ハ綜合大学ノ始メナルヲ以テ」という決議が妥当であるということになつたことであろう。

『五十年史』の前史は、前記のように、明治元年の新政府の学政創業からはじめている。この辺の決定がどのようにしてなされたのか、これは『五十年史』の編纂に當つて重要な問題点であるが、はっきり

した記憶はない。記憶のないところからすると、どうも、すんなりとなつたのであろうかと思われるのである。すんなりすんなりしたのは、要するに、編纂開始当時の明治史観の常識によつて、そうきめたからであり、また本学の立場から最も妥当というところに帰したのだということができる。

今日の「明治維新」の概念は、幕末から明治初年を一時期として一括するのが、ほぼ学界の常識となつている。明治維新の始期についても天保期とするか、嘉永、安政の開国期とするかの両説があるが、何れにしても幕末期を含めたものとなっている。ところが明治政府華やかな頃は、「王政復古」、「明治政府成立」が明治日本の光輝ある創業とされて、幕末期は、前代の終末期と否定的に軽くみられていた。つまり積極的に扱われず、末期的、消極的にしかみられなかったのである。これは明治新政権によつていわゆる「百事御一新」の新時代がはじまつたとしなければならなかったからである。『五十年史』が旧幕府の三官字の復興から筆をおこしたのも、つまり、右のような当時の明治史の常識によつたのである。とくに『五十年史』は官字の総本山の東京帝国大学の正史であるから、その淵源を明治新政府の創業と密着せしめることは、むしろ必然の要請であつたといわなければならぬ。『五十年史』の前史は、右のような情況のもとに決つたといつていい。すんなり決つたといふのはそういう意味なのである。いずれにしても『五十年史』は、従前の『一覽』と比べて新しい型を打出したものと見えるのである。

さらに当時の維新史の研究情況も右のような決定の背後にあつたこ

とを付言しておく。大正末、昭和のはじめ頃は、明治維新史の本格的な研究もまだ草創期であった。文部省の維新史料編纂会、吉野作造、尾佐竹猛らの明治文化研究会の業績、それに土屋喬雄氏らの維新経済史の開拓がスタートした頃である。当時はまだ昭和以降の研究によって確立する「明治維新像」の形成時代であった。さらに日本の近代大
学史の研究も各大学の学校史が個別的に記念事業として編纂されてい
るとい程度で、叙述は制度史の域をでなかった。そこで本学の歴史
像も前述したような沿革略的なものにすぎなかったのである。

法理文三学部源流なる蕃書調所——開成所についても研究らしいものがでたのは、沼田次郎氏の「蕃書調所について」(『歴史地理』七ノ五、昭和十三年)、故原平三氏の「蕃書調所の創設」(『歴史学研究』十二ノ九、昭和十七年)の二論文がでた以降で、筆者の『日本の大学』(昭和十八年五月刊)の記述も右の二論文を種本としたものであった。また昌平齋(昌平坂学問所)についても、『日本の大学』の執筆当時管見にいたった参考文献を掲げておいたが、これも三宅米吉の『聖堂略志』その他若干があるにすぎず、まだ研究以前の段階であった。右のような情況であったので、『五十年史』編纂着手の当時、前史の時期の研究のごときは、いわば白紙の有様で、史料の発掘からはじめなければならぬような情態であった(本史の部分も同様)。そのう
え筆者の未熟、非力からまことにおぼつかない情態であった。

明治二年の大学校

『五十年史』を明治元年の旧幕府三官学の復興から筆をおこすと、

『東京帝国大学五十年史』の編纂についで

ただちに逢着したのは、三官学を統一綜合した翌二年の「大学校」の存在であった。明治元年から筆をおこすとすればどうしてもまずこの山の位置づけをしなければならなくなってこれと取りくんた。ところが、私は当初、この大学校についてはその名さえ知らないという全くの初対面であった。この大学校については、『一覽』が、すでに述べたように無視である。これは東京大学が幕末の開成・医学両所の系列であるから当然であるが、明治政府の官学の歴史とすると、大学校を無視することは本筋を見失うことになる。『一覽』は洋学に偏したために、大学校については「明治二年、大学ヲ昌平坂ニ置クニ当リ之ニ隸シテ大学南校ト改メ、同四年、文部省立ツニ追ヒテ更ニ其所管ニ歸シ……」(『明治十六・十七年一覽』)と、書くだけで、その存在は全く無視である。のみならずその説明も「昌平坂ニ置クニ当リ」などと、大学校の実態をよく知らない書きぶりである。この大学校については『一覽』が無視しているのみならず、明治教育史、明治文化史も無知、無視である。当時の明治教育史は西洋式教育の歴史であったので、明治五年の「学制」を起点とするから、それ以前の無知はむしろ当然のことであったかもしれない。

調べようとすると、史料が乏しかった。学内から史料もかなりでてきたが、いずれも三学部系と医学部系の文書であったから、初期は大学南校・大学東校のもので、中心の大学校・大学関係の文書は皆無にひとしかった。これは大学南・東校の文書であったから当然である。『法令全書』、『日本教育史資料』七、『法規分類大全』(学政門、文部省)、『太政類典』等に基本文書があったが、これは布告、達、諸法規類の

公文書のみで、それだけでは実体、全貌はつかめない。大学校に関する記述としては、国民教育奨励会編の『教育五十年史』（大正十一年十月刊）の付録の辻新次講演の「学制を頒布する迄」と、加藤弘之講演の「学制以前の大学校に就て」ぐらいであった。この二講演が大変参考となった。しかし、この書も本論は「学制」頒布以降である。

そういうところに、平泉先生が松平家の春嶽公記念文庫（松平慶永文書）にある大学校関係の文書を一括借りだして提供された。これが大学校調査に大変役立った。松平慶永は文部卿兼大学校の総長にあたる大学別当であったので、その文書は重要である。そのうえ分量もかなりあったのでまことに有難いことであった。平泉先生は福井県人で越前松平家は旧主筋であったので容易に借用ができたのであると思われる。また、在学生の高橋勝弘の『昌平遺響』（明治四十五年）というパンフレットが手にはいった。慶永文書と『昌平遺響』で大学校内の紛争一件のこともほぼ明らかとなった。

大学校は、明治の大学史の冒頭の大きな山脈であって、これが幕末の大学と明治の大学との、いわば分水嶺をなしている。昌平坂学問所と、開成・医学両所の系統は、この大学校山脈を経由して明治の新時代に分け入ったのである。明治新政府は旧幕府から三官学を接受するとこれを総合し（それまで三官学は全く別々の存在であった、さらに加うるに、京都朝廷政府の皇・漢両学所の後身の大学校代を合流して、国学・漢学・洋学の三学総合という一種独特の総合大学を樹立した。これは旧幕府の遺産に、新政府の王政復古の理念を総合したものであったが、前者の旧幕府の遺産には漢学のほかに新興の洋学部門があっ

て、これが新時代の精神の担い手として優勢であった。この洋学部が後に伸びたわけであるから、大学校は、復古と維新の綜合体という総合大学であった。

明治二年の大学校は、まさしく維新政府の大学であり、そのイデオロギーの結晶ともいえるべきものであったが、その実態は、一夜づくりの寄木細工であった。政治的の急造物でその内実は、水と油の国学・漢学・洋学の混濁体であった。そこで成立と同時にやはり内部の矛盾、不統一から国学派と漢学派の苛烈なヘゲモニー争奪の紛争を引き起こしてわずか一カ年にして分裂自壊、政府もこれを失敗とみて閉鎖してしまつた。洋学派は別世界で、かえってこの自壊の余燼のなかから、分校の大学南・東校が維新面の新しい教育機関として発展して、やがて東京開成学校、東京医学校となり、さらに両校合併の東京大学となつた。であるから、幕末の開成・医学両所からストレイトに東京開成学校・東京医学校に展開したのではなく、一旦、大学校という山脈に吸収され、それを濾過したものである。この濾過の過程において山脈が崩壊したために本体の復古主義と儒教理念とが清算されて、洋学系の大学南・東校が新時代の大学の土台となりえた。そういう意味において明治初期大学史における大学校の意義（否定的）は大きいのである。

大学校は教育のほかに全国の学校行政、その他、修史、図書及新聞の検閲などの言論統制をも所管していたので、文化行政をも担当していた。この行政面が後に文部省となり、教育面がユニバシティとなつた。であるから明治二年の大学校は教育行政と専門教育の綜合機関であつた。『五十年史』は明治元年から筆を起したために、この大学校

という山脈の崩壊から明治の大学の成立過程を述べるということになったのである。しかし、『五十年史』は最初からこの山脈を起点として書く構想したのではなかった。前記のような明治史の一般的なとらえ方から明治元年を発端としたために、大学校に逢着して結果的に大学校から筆をおこすようになったのである。『五十年史』の前身の設定はそのようなものであったが、しかし、結果においてやはりこの前身はそれなりに意味あることであったといえよう。

大学校を起点とすると、この山脈自体の分析、その実体の解明が必要であるが、これは、日本の大学史の維新史の解明となるのである。『五十年史』は研究文献でなく、本学公刊の公的制度史であるから、

内容の分析はしていないが、かなりのページを大学校にさき、大学校に関する最初のまとまった史的叙述となった。しかし、当時の私はまだ駆けだしで、正直にいつてこの山脈を分析し料理するだけの力も、学識もなかった。ただ、右のような明治初頭の大学成立史の基本シエームだけは私なりに学びえたのだと思っている。

余談となるが、『五十年史』刊行後になって、私は大学校について今一步調べてみたいと思つて、個人的に改めて当時春嶽公記念文庫を保管しておられた松平慶氏子爵（春嶽の五男、当時宮内省式部長官）に御願ひして同文庫の大学校関係文書を閲覧した。そのためにかなり長期にわたつて当時麻布広尾にあった松平邸に通つた。そこでは旧臣の糟谷季之助という方に大変御世話になった。春嶽文庫は歴大な量で邸内の大きな土蔵に収まっていた。疎開先の福井の過般の戦火で大半焼失したそうであるが、大学校関係では各種の書類のほかに往復文書があ

つた。春嶽は実にたんねんな人で、来翰と差出書翰の控を小さな帳面に自分でめんみつに認めていた。メニューや外国人教師の名刺までもよく保存してあった。書翰控から関係文書を書きぬいたが、よく判読できないところがあつて実に閉口したものである。春嶽文庫のほか副島種臣（御用掛）文書、仙石政固（天学少監）日記、東大史料にある大学大丞松岡時敏文書などにも関係史料があつた。当時の調査を十分まとめなかつたが、その一部を「明治初年の大学校に於ける国学者対漢学者の抗争一件」という題で『明治文化』（十五の七、十六の四）に九回連載した。戦時中に創元社からだした小著『日本の大学』にはその結果をややまとめて書いた。また京都の皇学所・漢学所も大学校の前身の一部として扱う必要があるので『五十年史』にも略記した。皇学所については、これも後になつての話であるが、矢野玄道の後継の矢野太郎氏の好意をえて所蔵の玄道文書を採訪した。「学舎制」草案、日記、文書等の重要文書がよく保存されていた。また矢野氏から玄道の話もいろいろうかがつた。さらに、尾形裕康博士の配慮の御蔭で宮内省図書寮（現宮内庁書陵部）の「大学校学習院雑誌」を調査して「京都に於ける皇学所創立の事情」（『国史学』二六号）、「明治初年の学校問題と皇学所」（『歴史地理』六九ノ一・二・三）、「明治初年の学神祭」（尾佐竹猛編『明治文化の新研究』昭和十九年刊）などを発表した。つぎには漢学所であるが、これは、幕末の学習院がその前身である。この学習院・漢学所については近刊の『学習院百年史』の前身として寄稿した。これもこの大学校の前身の一部をなしているのである。

（おおくほ としあき・百年史編集委員会委員）